

Ω令息は、 α の旦那様の溺愛をまだ知らない3

常に穏やかで控えめな
王太子妃アデルの侍従。
番であるギルベルトと
長年すれ違っていたが、
今は仲睦まじい夫婦として
互いを支え合っている。

ユーリス

ギルベルト

ユーリスの番で
優秀な近衛騎士のα。
国の特務機関にも
所属している。
日頃は冷静沈着だが、
ユーリスへの愛情は深い。

ミハエル

ユーリスとギルベルトの
一人息子。
この頃、魔法の才能の
片鱗を見せている。

カシャム

ハディールの国王で
黒獅子の獣人のα。
番であるヴィルヘルムを
深く想いつつも、王として
責務と板挟みになっている。

アズラク

猫の獣人でΩ。
ヴィルヘルムの侍従兼護衛で
誰よりも彼を敬愛している。

マハリブ

虎の獣人でα。
カシャムより
将軍の位を
授けられた強力な戦士。

ヴィルヘルム

ユーリスたちの元主にして
今はハディールの王妃のΩ。
初めての人間の王妃として
何かと苦勞しているらしく……

アデル

平民出身の王太子妃でΩ。
天才的な魔法使いで
ハディールの王立魔法大学の
開校式に招かれた。

目次

Ω今息は、αの旦那様の溺愛をまだ知らない3
〈砂漠の黒獅子王と廃嫡の王子〉

番外編 とある虎と猫のその後の話

Ω令息は、αの旦那様の溺愛をまだ知らない3
　　（砂漠の黒獅子王と廃嫡の王子）

黄金が風に吹かれて波打っていた。

その風の奥に、白く輝く都が小さく見える。

どこまでも広がる青い空と、黄金の砂丘。乾いた風が頬を撫で、太陽は灼熱の輝きをまとっている。整えられた街道を貴族用の馬車で進んでいるとはいえ、自然の力は圧倒的だ。ユーリス・ヨルク・ローゼンシュタインを含めたシュテルンリヒトの一行は、僅かながらもようやく見えてきたハディールの王都に安堵の息を吐いた。

道中、大きな事故や天候不良に遭わずに来られてよかった、と安堵する大人たちとは対照的に、ユーリスの膝の上で呑気な声が上がった。

「かあさま、おつきなまちがみえます！」

「そうですね。ようやくハディールに着くみたいです。ミハエル、疲れてませんか？」

「だいじょうぶです。はやくおそとでたいなあ」

澄んだ紫色の瞳でにつこりと笑う我が子に、ユーリスは微笑み返した。しかし、一言釘を刺しておくことも忘れない。

「ハディールの街、楽しみですね。でもね、ミハエル。人がいる場所で魔法を使つてはいけませんよ」

「ええ〜」

「ミハエル」

北国シュテルンリヒトから、大陸の南部にある砂漠の大国ハディールまでの旅程は一月を超えた。その間中、ユーリスの頭を悩ませていたのは、やっぱり盛りを迎えた息子のミハエルだった。

特に最近では魔法が使えるようになって、好奇心だけで習ってもいない術式を使った魔法を披露するようになっていた。その結果、魔力が小さく暴走することも多々あり、ひやりとしたことは数え切れない。

「ミハエル様は魔法がお上手ですからねえ。でも、おつきな魔法を使うときは、俺かユーリス先生がいるところでやらないと」

「アデル様、そもそもハディールで大きな魔法を使つては駄目です」

おまけに、こうして周りの大人が嬉々として甘やかすからよろしくない。

ユーリスが仕える王太子妃アデル・ヴァイツェン・シュテルンリヒトは、王太子妃になる前からミハエルを可愛がってくれているせいか、ミハエルのことを「家臣の息子」としてではなく、「仲の良い小さな友人」として扱ってくれる。それが嬉しくもあり、こういうときは少しだけ困る。

「だって、ミハエル様。お母様の言うことはちゃんと聞きましょうね」

「ふふ、はあ、」

ふたりして笑い合う様子を見て、これはやるな、とユーリスは思った。

王宮内で爆発魔法を使われるのだけは絶対に阻止しなければいけない。などと思ったときだ。「アデル様、ユーリス。変わりはないですか」

馬車の外から声をかけられた。

外では護衛騎士たちが馬で同行し、この馬車を守っているのだ。

ミハエルが無防備に窓を開け、外から声をかけた人物に向かって満面の笑みを浮かべる。

「とうさま！」

そこには砂除けの黒いローブとマスクで顔を覆ったギルベルトがいた。

ユーリスの番であるギルベルト・ユルゲン・フォン・ローゼンシュタインをはじめとしたシュテルンリヒトの護衛騎士たちは、砂漠を移動するにあたりいつもの騎士服を脱ぎ、軽装を纏っていた。彼らが肩にかけるのはペリースではなく砂除けのローブで、乗っている馬も自身の愛馬ではなく道中にあつたオアシスの街で調達した砂漠に慣れた馬だ。

「ここまで来れば、昼前には王都に到着するだろうとのこと。まだ遠いですが王都が見えております」

そう言ったのは、クリスハルト・オイレだった。彼もまたギルベルトと同じようにローブで全身を覆っており、目元しか見えていない。

その真面目そうな凛々しい目を緩めて、嬉しそうに遠くの街並みを見ている。

玻璃宮でアデルの臨時護衛騎士を務めていたクリスハルトは、昨年のアデルを巡る陰謀で大怪我を負った。復帰後、その功績と誠実な人柄が認められ、下級貴族出身ながら王太子妃付きの専属騎

士に任命されたのだ。

今回の旅も、臨時でアデル付きとなったギルベルトとともに筆頭護衛騎士としてシュテルンリヒトから同行しており、警護責任者を務めている。

「はい、馬車の中からも美しい街並みが見えております」

ユーリスが嬉しそうに答えると、ギルベルトが目元だけで笑う。マスクで隠れていても、柔らかく細められた視線が温かく、じわりと幸せな気持ちになった。

「これから向かうのは、西側の大門ですね。ハディールの王都はぐるりと城壁で囲われています。門は全部で三つ。東西の街道に続く門と、南の海へと向かう門です」

王都の北には巨大なオアシスが広がっているため門はないのだ、と教えてくれたのは、ハディールから派遣された案内人キーリ・ナハムだ。

砂漠の入り口から合流した彼は、砂漠の旅に不慣れなシュテルンリヒト一行の道案内と世話を一手に引き受けてくれていた。

褐色の肌に金色の目をした彼は猫の獣人らしいが、耳や尾といった獣の部分はローブですっかり隠れてしまっている。

「ああ、やっとハディールに到着するんですね。街に着いたら何か美味しいものが食べたいです！うろろろする時間あるかなあ」

「今日はそのまま王宮に向かわなければいけないので無理でしょうけれど、市街地の視察はどこかで予定に入りたいですね」

「じゃあ、有名な市場に行きたいです！」

アデル曰く、ハディールの王都には大陸で最も大きいとされる市場があるという。観光名所にもなっているそこにぜひとも行きたいと言われて、ユーリスも頷いた。

ハディール滞在は二週間ほどを予定している。その間、ぎつしりと計画が詰まっているわけではないから、半日くらいであれば時間は作れるはずだ。

「では、市場には絶対に行きましよう」

ユーリスがそう言うと、アデルが歓声を上げた。そして、ミハエルを膝に乗せたままのユーリスに抱き着いてくる。

その無邪気な態度にユーリスは苦笑した。王太子妃になつてずいぶんと大人びたけれど、ユーリスの前では気が抜けるのか、こうして生来の天真爛漫さが全開になるときがある。

アデル生来の奔放さに驚くこともあるが、これもまた彼の魅力であり長所だ。微笑ましく思いこそすれ、咎める気にはなれなかった。

それにアデルの意見にはユーリスも賛成だった。

せっかく異国に来たのだから、街並みの散策はしたいし、有名な観光名所があるのであれば行ってみたい。

ハディールの魔法書が見たい。魔道具が見たいと、騒ぐアデルの声が外にも聞こえたのだろう。外から「アデル様」と声をかけられた。

「あと少しですが、最後まで気を抜かれませんかように」

「はあ」と

ギルベルトの言葉に慌てて居住まいを正したアデルに、ユーリスは思わず笑ってしまった。ハディールの王都まで、あと少しだ。

この春に婚礼を挙げ王太子妃となったアデルのもとに、ハディール王国王妃ヴィルヘルムから親書が届いたのは、今からひと月と少し前のことだ。

なんでも、ハディール王国で新しく創設する王立魔法大学の開校式に優秀な魔法使いであるアデルを招待したいということで、アデルとミハエル宛てに招待状を送ってくれたのだった。

何故ミハエルまで、と思ったユーリスだったが、答えはヴィルヘルムからの手紙に書かれていた。曰く、アデルの侍従であるユーリスと騎士のギルベルトはアデルについてくるだろうから、ミハエルがひとりで留守番をしなくていいように、とのことだった。

シュテルンリヒト王国の第一王子ヴィルヘルムが嫁いだ砂漠の大国ハディールは、シュテルンリヒトにとって代表的な友好国で、国同士の繋がりも深い。

王太子ルドヴィヒとアデルの結婚式に、国王カシャームとヴィルヘルム自ら参列してくれたこともあり、アデルのハディール行きはあっさりとは許可が下りた（留守番のルドヴィヒは、置いていかれることに少々落ち込んでいたが）。

その際にヴィルヘルムの予想通り、王太子の護衛を担当する近衛騎士隊第三部隊所属のギルベルトは臨時で第四部隊——つまり、アデルの護衛騎士となり、砂漠への旅に同行することになった。

アデルが正式にハディール王国への外交使節団の大使に任命されたのが一か月前。その後、大慌てで準備を整え、すぐにシュテルンリヒトを出立したユーリスたちは、ようやくハディールへと辿り着こうとしていた。

ハディールは大陸南部に広がる千里砂漠の中に築かれた獣人の国だ。

国土は千里砂漠全体で、点在するオアシスを中心に街が形成されている。南方には海が広がり、東はロウハンを始めとした国々へと続いていた。北には険しい山岳地帯があるため、多くの商人は東西へ移動する際、砂漠を越える。そのおかげで、ハディールは大陸中の商人たちが行き交う貿易の要所として栄えてきた。

ユーリスたちが到着した王都は、貿易都市の名に恥じない賑わいを見せていた。

大門を通った馬車は、大通りをまっすぐ王宮を目指して進む。窓から見える異国の光景に、ミハエルとアデルはおろか、ユーリスまで興味津々だった。

なにせ、三人とも生まれも育ちもシュテルンリヒト王国の王都で、国の外に出るのは初めてだ。目に見えるもの全てが物珍しく、興奮を隠せない。

「かあさま、なんだろうあのどうぶつ！ おおきいなあ」

「ユーリス先生、見たことない果物が積んでありますよ！」

「アデル様、ミハエル。落ち着いてください」

とはいえ、ユーリスはふたりのお目付け役でもある。

馬車の中から今にも身を乗り出さんばかりのふたりを制しつつ、苦言を呈する。

せつかく一国の大使として遠路はるばるやってきたのだ。興奮のあまり、馬車から転げ落ちて怪我でもしたら大事おぼこである。

しかし、ユーリスにもアデルとミハエルが大騒ぎする気持ちはよく分かった。

シュテルンリヒトとは違う、真っ白な石や土でできた家々。白い天幕の張られた市場では、ミハエルが言った通り、初めて見る動物が荷車を引いていた。おまけに――

「獣人……」

「みんな、あたまにさんかくのおみみがおはえてるね？」

きよとん、とミハエルが窓の外を歩く人々を見て言った。

ハディールは獣人の国だ。

街には人間の商人たちもいるけれども、目につくのは圧倒的に獣人が多い。

色とりどりの民族衣装に、全身を飾る銀細工。頭には布を巻くのがハディールの一般的な装よそおいらしいが、皆その布の隙間からひよこりと獣の耳が出ている。

案内人のキーリも獣人ではあるが、彼は道中ずつとローブを被っていてその耳を隠していた。見慣れぬ獣の耳に、ミハエルの目が輝いている。

ユーリスは以前、一度だけ会ったことがあるハディール国王カシャムを思い出した。若き黒獅子くろじの王もまた、頭の上に丸い獅子の耳が生えていた。あのときも獣人とはなんと美しい生き物かと思っただけれど、この国にはそんな美しい獣人たちが大勢いるのだ。

「なんだか、すごい国ですねえ」

アデルが笑いながら言った。ユーリスも同じ気持ちだった。

ハデイールの王宮はオアシスの畔にある。

王都自体が巨大なオアシスを中心に作られていて、放射状に通りが走っている。東西の街道と繋がる大門からオアシスに伸びる大通りの先が王宮だ。オアシスのより近くに身分の高い者たちが住んでいるようで、遠ざかるにつれて街並も庶民的な賑わいを見せている。

黄金の屋根が輝く白亜の宮殿はジョハラ王宮という。宝石の名を冠す通り、王宮内はいたるところに寶石や貴石が飾られ、床や壁は色とりどりの施釉タイルで装飾がなされていた。

王宮をぐるりと囲む門をくぐると、真っ白な大理石で造られた回廊や清らかな水の流れる水路がユーリスたちを迎えた。水が貴重な砂漠の国では、水をふんだんに使えることが富の証なのだろう。

王宮の見事な造りを眺めていると、ユーリスたちは馬車から降ろされた。騎士たちもまた馬から下り、中へと案内される。

「陛下と妃殿下にご一行のご到着を報告に上がります」

キーリがそう言って、一礼したときだ。

「その必要はありません。妃殿下はすでに謁見の間にて皆様のご到着をお待ちでございます」

凜とした声とともに現れたのは、黒髪の獣人だった。

ほっそりとした体躯に褐色の肌。さらりとした髪は頬のあたりで切り揃えられていて、彼の動きに合わせて揺れている。頭の上にあるびんと立った三角の黒い耳と、空のような真っ青な瞳が印象

的だった。

だが、真っ先に目を惹くのは彼の首に嵌った金色の首環だろう。細い首を飾る金細工は、彼の項をしつかりと覆っている。それは、ユーリスやアデルがかつてしていた首環と同じものように見えた。――彼は、オメガなのだ。

この世界には、六つの性別がある。

見た目で分かる男女の性と、二次性と呼ばれる三つの性。それらをかけ合わせて合計六つの性だ。能力が高く見目麗しいアルファ。最も人口の多いベータ。それから男女ともに子どもを産むことができるオメガだ。

ユーリスは男性のオメガであり、だからこそミハエルを産むことができた。

オメガが孕む性と呼ばれる所以である。

その特性ゆえに、オメガは社会的な地位が低い。シュテルンリヒトでは特に、オメガはアルファの所有物であるという認識が潜在的に存在し、アデルが王太子ルードヴィヒと婚姻を結ぶまで王家にオメガは必要ないとまで思われていた。

そのため、職業にも大きな制限があり、騎士や護衛といったアルファが多い職業には就くことが許されなかった。しかし、ハデイールでは違うのだ。

「お初にお目にかかります。私はヴィルヘルム殿下の護衛兼侍従を務めております、アズラク・ノーラと申します」

「あ、アデル・ヴァイツェン・シュテルンリヒトです。えーっと、このたびはお招きありがとうございます」

ざいます。こっちは私の侍従を務めるユーリス・ヨルク・ローゼンシュタイン。その後ろに控えているのが護衛騎士のギルベルト・ユルゲン・フォン・ローゼンシュタインとクリスハルト・オイレスです」

アデルに紹介され、ユーリスたち三人はシュテルンリヒト式の礼を執る。

ユーリスとギルベルトを見て、アズラクは表情を緩めた。

「我が主より皆様のお話はよく聞いております。遠いところをよくお越しくございました」

「あの、カシャーム国王陛下との謁見は夜だと聞いていたのですが」

こちらへどうぞ、と案内されそうになって、ユーリスは慌てて口を挟んだ。

事前にキーリから聞いていた話では、カシャーム王との謁見は夜に予定されているとのことだった。

その後、歓迎の宴を開くとのことで、ユーリスはそのつもりで準備してきたのだ。だが、先ほどのアズラクの言葉からすると、このままヴィルヘルムのもとに連れていかれそうだ。

驚くユーリスに、アズラクは「ご心配には及びません」と返した。

「国王陛下との謁見は、事前にお知らせしている通り夜となっております。今からご案内しますのは、妃殿下のみに会っていただく非公式な席でございます。ヴィルヘルム妃殿下が、一刻も早く皆様のお顔が見たいとおっしゃって。妃殿下はここひと月ほど、皆様のご到着をそれはそれは楽しみになさっておいだったのです」

微笑みながら語るアズラクの耳が嬉しそうにびるる、と動いた。

その様子にミハエルが目を輝かせた。おまけに、彼が着ているゆつたりとしたハレムパンツの腰の部分から、黒くて長い尾がゆらゆらと揺れている。その物珍しさに、ミハエルは釘付けだ。

「しっば、ねこさん……?」

「珍しいですか? そうか、人に尾はありませんものね」

ミハエルの呟きを聞いたアズラクがにこりと笑った。そのまましゃがんで、ミハエルと視線を合わせてくれる。

「ご名答。私は猫の獣人です。ほら、耳も尾も猫のものでしょうか? あなたがミハエル様ですか?」

「はい。ぼくのこと、しってるの?」

「もちろんです。ヴィルヘルム妃殿下はミハエル様にもお会いしたいとずっとおっしゃっております。ようこそハディールへ、ミハエル様。ミハエル様には私の耳と尾が珍しいですが、私にはミハエル様のお耳の方がずっと珍しいです」

「そうなの?」

「そうですね。この国では獣人よりも人の方が珍しいのです。それくらい、多くの種族の獣人が暮らしておりますよ。猫以外の獣人にも会えるでしょうから、楽しみにしてください」

「うん!」

「では、皆様。妃殿下のもとへご案内いたします」

アズラクはそう言って立ち上がり、ユーリスたちを促した。そのままの格好で大丈夫、と言われ、躊躇ためらい一つも彼の後について歩く。

ミハエルはすっかりアズラクに懐いたようだった。ユーリスと繋いだ反対側の手をアズラクに握ってもらってご満悦だ。満面の笑みを浮かべて、アズラクの案内に従っている。

アズラクはユーリスたちを連れて、回廊を進んでいく。

「こちらは王が主に執務を行う太陽宮です。謁見の間や宴を開く大広間などもこちらに」

大理石の円柱で支えられた天井は美しいアーチを描いており、その全てに繊細な彫刻がなされていた。壁は色鮮やかな施釉タイルや漆喰細工で飾られ、見ているだけのため息が出る優美さだ。

荘厳なシュテルンリヒトの王城も美しいが、ハディールのジョハラ王宮にはまた違った建築美があった。

太陽宮という名の外延をしばらく進むと、アズラクは一枚の扉の前で止まった。

「どうぞ、ここが謁見の間でございます」

そう言うと、扉の両脇に控える警備兵に向かって頷いた。そして、分厚い木と鉄でできた扉を叩く。

「シュテルンリヒト王国の大使、アデル・ヴァイツェン・シュテルンリヒト妃殿下ご到着でございます」

「入れ」

アズラクの声に答えて、中から凜とした声が響いた。

ゆつくりと開けられた扉をくぐり、謁見の間へと足を踏み入れる。

彫刻の施された円柱に、床や壁を飾るタイル。それらは回廊のものとよく似ているのに、全てが違う模様を描いていた。複雑な細工のされた窓から光が射し込んで、床に影を落としている。

部屋の奥の一段高くなった場所に、象牙や貴石で飾られた台座と柱があった。そこに置かれた長椅子に、豪華なハディールの装束を着た金髪の青年が座っている。

「結婚式以来だな、アデル。ユーリスとギルベルトも急な招待だったのに遠路はるばるよく来てくれた」

緩やかに波打つ髪は光を溶かし込んだような輝きで、白皙の美貌は女神のごとく繊細だった。彼の目が覚めるような青い瞳も雪のような白い肌もこの国では珍しいが、ユーリスにとってはひどく懐かしいものだ。

「ヴィルヘルム殿下。お久しぶりでございます」

その場で道中何度も練習した大使としての口上を言おうとしたアデルを、ヴィルヘルムは笑って制す。

「アデル、今は堅苦しい礼はしなくていいぞ。非公式の場だからな。カシャームもいないし、気楽にしてくれ。部屋が仰々しくて申し訳ないが、僕が君たち全員に会うにはこの部屋を借りるしかなくてな。諦めてくれ」

広々とした謁見の間を見回してそう言うと、ヴィルヘルムは椅子から立ち上がり軽い足取りでユーリスたちのもとへとやってきた。そして、ユーリスとアズラクの間にいたミハエルの前で膝を折る。ミハエルが、「わ」と小さな声を漏らした。

「君がミハエルかい？ 初めまして、僕はヴィルヘルムだ。君の母上と父上は僕の古い友人なんだ。君も友だちになってくれると嬉しい」

「ともだち？ いいよ」

恥ずかしそうに笑ってミハエルが答えると、ヴィルヘルムは嬉しそうに破顔し、そのままミハエルを抱き上げる。

「よし、みな砂漠の旅は疲れただろう。部屋に案内する。アズラク、キーリ」

「はい。アデル妃殿下、ユーリス様、ミハエル様は月宮にありますが後宮内に、ギルベルト様たち護衛騎士の皆様は太陽宮内の客間にお泊まりの用意をさせていただいております。月宮までは私が、太陽宮内はキーリがご案内いたします」

「カシャームとの謁見までは時間がある。それまで少し休むといい。その後、歓迎の宴を開くそう。部族長たちも揃った堅苦しい晩餐会だが、料理は美味しいだろうから少しだけ我慢してほしい」

「魔法大学の開校式は予定通り、二日後でございます」

ヴィルヘルムの言葉を補足するようにアズラクが言う。

それらの予定は、予め聞いていた通りだ。

だが、ギルベルトら護衛騎士たちとアデルの部屋が分かれることは今初めて知った。当然、アデルの護衛騎士であるクリスハルトやギルベルトは異を唱える。

「ヴィルヘルム殿下、我々はアデル殿下の護衛です。離れるわけには」

「そうは言っても、王宮ではオメガの客人は月宮内にしか泊まらない。だが、月宮は後宮だから、男のアルファは入れないんだ」

後宮は一夫多妻が許されるハディール王の妃たちが暮らす場所だ。

そのため、王以外のアルファとベータの男性の立ち入りは禁忌。王子たちですら成人したら易々と足を踏み入れることはできないという。

「しかし……」

「月宮の周りには警備の兵が山ほどいるから、そう神経質にならなくてもいい。人っ子ひとりどころか、ねずみだつて入れない。僕の護衛もアズラクだけだ。それに魔法は使えるから、アデルなら心配はいらないんじゃないか」

躊躇うギルベルトにヴィルヘルムが言う。

ギルベルトの性格上、だからといって護衛対象から離れるなんて許せることではないのだろう。けれど、ハディールのしきたりとして後宮に入れないことも理解している。そんな番の複雑な心中を察して、ユーリスはギルベルトに耳打ちした。

「ギル、大丈夫です」

「ユーリス」

「ヴィルヘルム殿下もあおつしゃっていますし、魔法も使えますから。万が一の際は、私が命に代えてもアデル様をお守りいたします」

異邦人であるユーリスたちはハディールの決まりに従う必要がある。

護衛騎士たちが後宮に入れないのであれば、入れるユーリスがなんとかするしかない。

ギルベルトが少しでも安心できるように、任せてくださいと胸を張ると、険しかったギルベルトの表情が少しだけ和らいだ。

「本当に、心配しないでください。ヴィルヘルム殿下が安全だと言うのだから、危険はないはずで
す。殿下がアデル様や私を危ない目に遭わせるはずがありません」

「……はい」

それ以上の言葉をぐっと呑み込んだギルベルトは、心配そうな顔で頷いた。

実際、魔法が使えるのであればアデルは最強だ。よほどのことがない限り危険はない。

「まあ、そう心配するな。ハディールではオメガは丁重に扱われる」

「分かりました。では、王宮内の警護はそちらに一任させていただきます。しかし、有事の際はそ
の限りではありませんので」

「分かった分かった」

予定通り王宮外での護衛はギルベルトたちが行うことを確認して、納得できないなりになんとか
譲歩した形となった。

「ミハエル、父様とは少しバイバイですよ。夜は母様と一緒に寝ましょうね」

ヴィルヘルムに抱えられたミハエルに声をかけると、きよんとした顔でミハエルがギルベルト
に手を振った。

その丸い頭をギルベルトが大きな手で撫でる。

「アデル様と母様を頼んだぞ」

「はい！」

「よろしいでしょうか。では、アデル妃殿下、ユーリス様こちらに」

また後で会えるとはいえ、夜の部屋が別々なのは少し寂しいが仕方ない。

ヴィルヘルムとアズラクを先頭に、ユーリスたちは謁見の間を出た。

ヴィルヘルムがユーリスたちを真つ先に連れて行ったのは、巨大な浴場だった。

一面がタイルで飾られた豪華な造りのそこは後宮（ハレム）の一面にあたることで、アデルとユーリス、
ミハエルのみが使用を許可されている、と説明を受けた。

「砂漠の旅で身体中砂だらけだろう。服もハディールのものを用意したから、着替えるといい」

浴場は内部まで華美な装飾が施されており、一度に何人も入浴できるほどの広さがある。浴槽は
あるが、ハディールは蒸し風呂が基本だそうで、薄い入浴着を纏って湯気を浴びるのだという。

そこで何故かヴィルヘルムとともに汗と砂を流し、ユーリスとアデルは用意されたハディールの
衣装を身に纏った。

灼熱の太陽が大地を焼く砂の国の衣装は、北国シユテルンリヒトよりもゆったりとしている。

絹で作られた薄い服は袖がなく、その上から刺繍入りの紗（シヤ）の上着を纏う。下はアズラクと同じよ
うなハレムパンツで、上着とともに腰を飾り帯で締めてそこに金細工を飾る。頭から上着と同じ刺
繍の入ったベールを被って出来上がりだ。

さらに後宮の外に出る際は、この上に長衣を羽織る。先ほど、ヴィルヘルムが身に纏っていた豪
奢な衣装はその長衣で、彼は長衣の上からもじゃらじゃらと金細工をつけていた。

「着方はこれで合ってますか？ なんか変じゃないですか？」

「大変お似合いですよ。とてもお美しいです」

何度も鏡を見て確認するアデルにユーリスは答えた。

アデルの首には、シュテルンリヒトからつけてきたレース織りのチョーカーがハディールの金の首飾りと重ねられており、ふたつの文化が見事に調和している。明るい色の衣装はアデル自身の可愛らしさをよく引き立てていて、まるで花の精のように可憐だ。

しかし、当のアデルはその可愛らしい顔を盛大にしかめる。

「なんか、飾りを落とさないか心配なんですけど。アズラクさんの服は飾りが少なくないいなあ」
慣れない装いに動きにくそうなアデルにアズラクが笑う。

「アデル妃殿下のためにご用意したものですから、特別豪華なのです。飾りは身分が上がるほど豪華になっていきます。私などは護衛も務めますから、動きやすさ重視ですね」

それでも腰や胸元にはじゃらりと装飾品が光る。腰に佩いた短刀を見て、ユーリスは感心した。

「ハディールではオメガの方でも護衛騎士になれるのですね」

シュテルンリヒトではオメガが働くことはまずあり得ない。市井しせいの民たみは別として、貴族のオメガは基本的に王立魔法学園を卒業したら、すぐに結婚するものだった。ヴィルヘルムが玻璃宮にいた頃は、例外としてオメガの王宮への出仕が許可されたが、現在でもそれ以外の職務には就くことはできなかった。

「そうですね。ハディールでは性別で仕事制限されることはあまりないかもしれませんが。特に後宮ハレムには男性はオメガしか入れませんから、オメガの騎士はわりと重宝ちゆうぼうされるのです。とはいって

も、今は後宮にはヴィルヘルム妃殿下しかおいでではありませんし、護衛も私だけですけれども」

「後宮に、たくさんお妃様がいらっしゃるんですか？」

アズラクの言葉にアデルが首を傾げる。

シュテルンリヒトでは一夫一妻が基本だ。貴族のアルファにオメガの妾がいることはよくあるが、妾は所詮妾。決して本妻と同列にはなれず、本邸に迎え入れられることはない。

だが、ハディールの後宮は違う。先ほどの浴室を見ても分かる通り、「妃」の位に複数の女性やオメガがいることが当たり前だという。

今、ユーリスたちがいる部屋は身支度を整えるための部屋らしいが、ここにも鏡や椅子がたくさんあった。

「はい。王にとって王妃はひとりですが、側妃は何人でも持てます。三代前の王の時代は妃が百人を超えたとか」

「百人！ そのお妃様たちがみんな一緒に暮らすんですか？」

「もちろんです。そのため後宮ですから。側妃が少ない王でも、最低三人はお迎えになることが通例です」

アズラクの話に驚きつつ、ユーリスはヴィルヘルムを見た。

彼はこの前の結婚式で「カシャームと番になった」と話していた。そのときの仲睦まじい様子を思い出して、複雑な気持ちになる。

番がいれば番のアルファとしか触れ合えないオメガとは違い、アルファは番以外でも抱くことが

できる。だからこそ、カシャームも側妃を迎えることが可能だ。

だが、ヴィルヘルムの心情としてはあまり面白くないだろう、と思ったが、当のヴィルヘルムはアズラクの話聞いても平然としている。

「まあ、そのうち増えるかもしれないが、今は僕ひとりしか妃がいらないから後宮ハレムも静かなものだ。気兼ねなくのんびりしてくれ」

言いながら、自らの衣装を整えていく。慣れた様子で帯を結ぶ彼は、シュテルンリヒトにいた頃よりも自由になったはずだった。けれど、ハディールの衣装もまた重たく、身動きが取れないと感じたのは、ユーリスの勘違いだろうか。

慣れない服を整えるのに手間取っていると、あつという間に時間が過ぎた。

特にユーリスは今後アデルの服を着せなければいけないから、アズラクに侍従として衣装の着付け方をしっかりと習う必要がある、全て着終わったときにはすっかり夕方になっていた。

「あまりゆっくりはできなかったな」

相変わらずミハエルを抱えたままのヴィルヘルムがそう言って笑う。

膝に乗るミハエルもまた用意してもらったハディールの子どもの用の装束を着て、頭に布を巻いていた。

ミハエルの服は、長衣はもちろんのこと帯や頭に巻く布にまで隙間なく刺繍がされており、大変手が込んでいる。なんでもハディールでは、刺繍は護符としての意味合いもあり、子ども服には厄

除けとしてびっしりと刺繍をするものらしい。

ヴィルヘルムに「似合っている」と手放して褒められて、ミハエルはとても嬉しそうだった。

通された部屋からは美しい後宮の庭がよく見えた。庭に面して大きな露台があり、窓を開け放しておくと乾いた風が入ってくる。

「綺麗なお庭ですね。見たこともない花がたくさん咲いています」

「王宮はオアシスからの水をたっぷり引いているからな。市街地よりも緑がよく育つ」

謁見まであと少し時間があるから、とアズラクがお茶の準備をしてくれた。

シュテルンリヒトとは違い、ハディールでは椅子に座るのではなく床に敷かれた絨毯じゅうたんに直接腰を下ろす。毛織の鮮やかな絨毯の上には、これまた色鮮やかな刺繍がされたクッションや座布団がたっぷりと置かれていた。

その座布団のひとつに腰を下ろし、ユーリスは銀杯に入ったお茶を一口飲む。

アデルとユーリスの前には干した果物や木の実が載った銀皿があった。こういう軽食をお茶とともに楽しむのがハディール式で、午後のお茶は平民貴族問わず大切な時間なのだという。

後宮はヴィルヘルムの言う通り、とても静かだった。

なにせ、侍従がアズラクしか見当たらないのだ。護衛はオメガの騎士であるアズラクひとりだと聞いてはいたが、侍従も彼が兼任しているらしい。

「ヴィルヘルム様、ずいぶん人が少ないようですが、アズラク様以外の侍従はいないのですか？」
アデルも結婚するまではユーリスが教育係兼侍従をひとりで務めていた。

しかし、王太子妃となった今は侍従、侍女を含めて十数人はいる。それでも立場を考えると少ないくらいだから、ヴィルヘルムのような他国から嫁いできた国王唯一の妃の侍従が、ひとりきりとは考えにくかった。

けれども、ヴィルヘルムはあっさりと首を横に振る。

「いないな。下女はベータの者が五人ほどいるが、それ以外は誰も」

「誰も？ しかし、それは不便ではありませんか？ それにアズラク様の発情期ヒートのときはどうされているのですか？」

驚くユーリスにヴィルヘルムは答える。

「そう不便でもない。自分のことは自分でできるし、渡ってくるカシャムもあまり手がかからない。アズラクは発情期のとき一日しか休まないから、下女たちだけでもなんとかなるんだ」

「一日？」

ヴィルヘルムの言葉にユーリスはさらに驚いた。

発情期は成熟したオメガに定期的に訪れるもので、激しい性的衝動を伴う。

周期や期間は個人差が大きいが、どれほど短くても一日というのはあり得ない。

「ハディールの抑制剤はよく効くのです。お休みをいただいているその一日も必要ないくらいで、発情期でも普段通りの生活が送れます」

「それは、すごいですね」

シユテルンリヒトに流通している抑制剤では、どれほど品質が良くてもそこまでの性能はない。

どうしても始まって三日ほどはアルファを誘うフェロモンが外に漏れてしまうし、オメガとしての欲求もなくならなかった。それを全て抑え込んでしまえるとは、ハディールの抑制剤はシユテルンリヒトのものよりもずっと性能がいいのだ。

「リリエル様がハディールで魔法薬の勉強がしたいって言ったの、こういうことだったんですね」
アデルが感心したように言った。

リリエルというのは、かつてユーリスが家庭教師を務めたオメガで、アデルの学友でもあった。

彼はシユテルンリヒト王国内におけるオメガの発情抑制剤の品質の向上と、その普及を目標に自ら商会を立ち上げ、現在は薬草の勉強をするために東国ロウハンに留学している。しかも、そこで数年学んだ後は、魔法薬学の研究のためハディールに留学する予定だった。

「獣人は人よりも魔力が少ないんだ。それを補うために魔法薬の需要が高くて、必然的に研究が盛んでな。抑制剤をはじめとしていい薬がたくさんある」

「はあく、いいですねえ。シユテルンリヒトじゃなんでもかんでも魔法でなんとかしようとするけど、抑制剤は魔法じゃ無理だもんなあ」

子どものように目を輝かせるアデルに、ヴィルヘルムがふふ、と笑った。

「今ある王立の魔法薬の研究室は、今後は大学内に移る予定なんだ。興味があるなら滞在中に見学していけばいい」

「いいんですか？ 俺は魔法薬は専門外だけど、興味はめちゃくちゃあります」

「もちろん」

ヴィルヘルムの言葉にアデルがユーリスをちらりと見る。ユーリスとしても視察先が増えることに異論はないし、ハディールの魔法薬の研究室を見せてもらえるなんてとても光栄な話だ。

「では後日、日程を決めましょうか。殿下、先方へのご連絡はどのようにしたら」

「アズラク、開校式のときに学長にその話ができればよろうか」

「可能だと思います。事前に書簡を送っておきましょう」

「ありがとうございます」

アズラクの無駄のない返答にユーリスは感心する。さすが、ひとりきりで後宮を回しているだけのことはあるな、と思つた。

「アズラク様がとても優秀でいらつしやるから、殿下の侍従はおひとりでよいのですね」

「そうだな、アズラクには本当によくしてもらっている。まあ後宮は広いから、管理面で言うとアズラクや下女たちには無理をさせて申し訳ないが」

「そんな、めつそうもないことでございます。今は後宮の部屋も半分以上閉じられておりますので、そう負担はございませんよ」

「そうなんですか？」

「はい。後宮には広大な敷地の中にいくつもの離宮があるのですが、カシャーム王には妃がヴィルヘルム妃殿下しかおられませんから。身分の低い側妃や妃としてみなされない妾が住む後宮の端の部屋は全て施錠されております」

ユーリスたちのために用意されたこの部屋も、本来であれば王妃に次ぐ身分の側妃の部屋である

らしい。

「もともとハディールでは、妃となる者は自らの生家から使用人を連れて後宮に上がるのです。ヴィルヘルム妃殿下はシュテルンリヒトからおひとりで嫁がられたので、黒獅子族の私が侍従としてお仕えしております」

「黒獅子族というのは、カシャーム陛下の」

「はい」

ハディール王国は六つの獣人の氏族によって興された国だ。

王は代々黒獅子の一族が務め、現在は黒獅子のアルファであるカシャームが国王だ。

黒獅子族自体は猫獣人たちの集まりで、獅子のアルファだけではなくアズラクのような猫の方が多いのだという。その他に赤虎族、白鷺族、青牛族、月兎族、銀鯨族と続く。

「後宮にはベータやアルファの女性も上がれますが、基本的にはオメガが推奨されます。獣人は同族としか子がなせませんが、オメガであればどんな種族のアルファの子でも産めますので」

「おまけに、オメガが産むのは父親であるアルファの一族の子だ。だから、この国ではオメガは大切にされるんだ」

「つまり、獅子の王様の赤ちゃんを産むためには、お妃様は猫獣人の女の人かオメガじゃなきゃダメってことですか？」

干し杏を頬張りながらアデルが訊ねた。

「そうです。ですから水棲獣人の銀鯨族や鳥獣人の白鷺族出身の妃たちは、これまで全てがオメガ

の妃です」

オメガはこの国でも数が少ない。それなのに自らの種族のアルファを望むのであれば、オメガと番わなければならないとは。圧倒的な身体能力がありながら獣人の数が増えないのは、そういう理由もあるのだろうか。

「オメガが王様の子を産んだら、みんな獅子になるんですか？」

「その通りでございます。必ず父親と同じ大型種のアルファが生まれます。そのため、妃の種族はオメガでありさえすれば、あまり重要視されません。たとえ異国の奴隷でも王の子を産めば重用されますから、昔はこぞって後宮にオメガを入れたがつたそうです」

ハディールでは黒獅子のアルファのみが王位を継ぐ。

ゆえに、黒獅子族以外で権力を得るためには王の外戚になるしかない。

ユーリスが学んだハディールの歴史では、自らの息のかかった王を即位させるため、権力者が身分の低いオメガを金で買って後宮に入れていた過去もあると書かれていた。

そしてそれは、今も変わらない。

「じゃあ、今も黒獅子族以外の部族の人たちは側妃を入れたがつてるんじゃないですか？」

アデルの言葉にユーリスは固まった。

部族間の力関係を考えると、まさにその通りだろう。一瞬、ひやりとしたユーリスの考えを否定したのは、ヴィルヘルムではなくアズラクだった。

「確かに、打診は各部族長たちから何度もされています。しかし、当のカシャーム陛下が側妃を望

まれておりませんので」

「国王陛下ご自身が断っておいでなのですか」

「はい。妃はヴィルヘルム妃殿下のみでよいと」

「今のところはな。それよりアズラク、そろそろ支度をしなくてはまずいんじゃないか」

ヴィルヘルムに言われて、アズラクは慌てて時計を見た。空は徐々に茜色から藍色に変わろうとしており、宵の口と呼んでいい時間になっている。

「そうですね。では、上着をお持ちいたします。アデル妃殿下もユーリス様も、そちらを着て頭巾を被ってください。ギルベルト様たちとは、後宮の外で合流して謁見へとまいります」

アズラクがそう言って、席を立った。

ギルベルトたちと落ち合ったのは、後宮の入り口だった。

キーリとともにアデルやユーリスたちが後宮から出てくるのを待っていたのだ。

色とりどりのハディールの衣装を着たアルファの集団は、後宮の中からでもよく目立っていた。

その中でもユーリスの目を惹いたのは、もちろんギルベルトだった。

背の高い騎士たちの中にあってもなお、ひと際凛々しく、立ち姿が美しいと思うのは惚れた欲目というものだろうか。思わず見惚れそうになってしまい、ユーリスは慌てて視線を逸らす。

ギルベルトは金糸で刺繍された藍色の長衣を着て、腰を飾り帯で締めていた。その上からやはり金細工を巻いて華やかに飾り、頭にはミハエルと同じように布を巻いている。

見慣れない格好ではあるが、ものすごく似合っていた。

けれども、ハディール風で纏まった衣装の中、腰には愛用の剣を佩いており、そこだけが少々無骨で浮いて見えた。しかし、それもまた騎士としての彼の真摯さを表しているようで、ユーリスには実に好ましい。

「お待たせしてしまいましたか？」

「いいえ。騎士様方が、どうも落ち着かない様子です。後宮の中には入れませんが、じつとしていられないと早めに部屋を出られたのです」

アズラクの言葉にキーリが答えた。

ギルベルトたちもてなされたそうだが、護衛対象であるアデルと離れてゆつくりはできなかったのだろう。早々に休憩を終えて、後宮の入り口で待機していたらしい。

クリスハルトをはじめとした彼らは、一様にアデルの元氣そうな姿を見て安堵の表情を浮かべていた。

「ユーリス、後宮の中はどうでしたか」

ギルベルトが近づいて、耳元でこっそりと訊ねる。

「とても静かでした。ヴィルヘルム殿下がおっしゃっていた通り、護衛はアズラク様のみで、侍従も兼任されているそうです。その他はベータの下女が五人だけだとか。見知らぬ者が現れたらすぐに分かります」

「そうですか。こちらで外から後宮を見ていたのですが、ハディールの警備に問題はありません」

真剣な顔で言われて、ユーリスも気を引き締めた。

友好国とはいえシユテルンリヒトから遠く離れた異国である。用心するに越したことはない。

「ですが、アデル様に何かあれば国際問題です。申し訳ありませんが、ユーリスには今後もアデル様の身辺には注意していただきたい」

「もちろんです。先ほども言いましたが、命に代えてもアデル様はお守りいたします」

職務に忠実な番を見習って言い切ると、ギルベルトが複雑そうに表情を曇らせる。普段あまり感情を表に出さないギルベルトが、仕事中にこんな顔をするのは珍しい。

「どうしましたか？」

「後宮にアルファが入れないことも、アデル様の護衛をハディールの兵士たちに任せなければいけないことも納得はしているのですが……ユーリスにそんなことを言わせてしまい、すみません」

おそらく、ユーリス以外には分からない程度の変化だろう。だが、ギルベルトは明らかに落ち込んでいる。

いつもは頼りがいのある彼がしょんぼりと肩を落とした様子が可愛らしく、こんな状況だということにユーリスは思わず相好を崩してしまう。

「普段はギルに頼りっ切りですから、たまには私も頑張ります」

「たまにはなどと。私こそユーリスには助けられてばかりで」

ユーリスが張り切って言うのと、ギルベルトはますます恐縮したように返す。最終的に見つめ合って照れ臭くなっていると、そこにぬっと割って入る影があった。

「はいはい。仲が良いのはいいことだけれどね、そろそろ謁見の間に行かないといけない時間だ」「じかんだよ」

声をかけてきたのは、ミハエルを抱えたヴィルヘルムだった。ミハエルもヴィルヘルムの声真似をしてにこにここと笑っている。

「ギルベルト、ハディールの衣装がよく似合っているぞ。なあ、ユーリス」
「はい、とてもよくお似合いです」

ユーリスが頷くと、ギルベルトが微かに眉根を寄せた。一見怒っているように見えるが、これは照れているときの顔だ。この一年と少しでユーリスはずいぶんギルベルトの表情が読めるようになってきた。

「ふふ、アデルとユーリスの衣装は、僕が似合いそうなものを選んだんだ。どうだギルベルト、ユーリスもとても似合っているだろう。気に入ったかい？」

「殿下」

椰揄うように言われて、ギルベルトが閉口する。そんな彼の様子を見てヴィルヘルムが愉快そうに笑った。

「かあさまはとつてもきれいです」

「ありがとう、ミハエル」

黙ってしまったギルベルトの代わりに、と言わんばかりにミハエルが大きな声を上げた。
「アデルさまもヴィルヘルムさまも、アズラクもみんなかわいい」

「おや、ミハエル。君は素直でいいな。将来きつとモテるぞ。父上と違って」
「殿下！」

和やかな空気の中、アズラクから「そろそろ時間です」と促される。
ヴィルヘルムを先頭に、ユーリスたちは昼間訪れた謁見の間に再び足を向けた。

明るい日の光の中で見たジョハラ王宮も美しかったが、黄昏なつかれに浮かぶ白亜の宮殿も違う美しさがあった。燃えるようだった茜の空はいつの間にか藍色に変わり、東の空には星々が瞬またたき始めていた。漆喰細工で飾られた壁には魔導洋燈ランが輝き、紫暗の闇を明るく照らしている。

謁見の間の扉をアズラクが叩き、ヴィルヘルム自ら名乗りを上げた。
「ヴィルヘルムだ。シュテルンリヒトからの友人たちをお連れした」

すると、中からの応えを待たずに左右に控える兵士たちが扉を開けた。
「ヴィルヘルム王妃殿下、およびシュテルンリヒト王国王太子妃アデル・ヴァイツェン・シュテルンリヒト妃殿下のおなりでございます」

謁見の間は先ほどとはがらりと様相を変えていた。

薄暗く、外から射し込む日差しが影を作っていた昼間とは違い、壁の洋燈とうちうには煌々と火が灯され、室内は明るい橙色に輝いていた。広々とした広間の両脇には、大勢の重臣と思われる獣人たちが居並んで、ユーリスたちをじつと見ている。

その威圧感にユーリスは思わず息を呑んだ。

——これが、獣人。

アズラクが「多くの種族の獣人が暮らしている」と言っていた通り、謁見の間に集まった獣人たちの種は様々だった。

カシャームのような獅子の耳と尾を持つ者や、頭に大きな角が生えている者。背中に翼がある者など、見慣れない姿形はユーリスに本能的な恐怖を抱かせた。

つい百年ほど前までは、人と獣人は互いに相手を異形として争いを繰り返していたらしい。

大勢の獣人に囲まれると、その当時の人々の思想を簡単に愚かだと断じられないような気がした。だが、そんなユーリスとは対照的に、ヴィルヘルムはなんの躊躇いも見せずに広間の中央、つまり並ぶ獣人たちの真ん中を進んでいく。それにアデルが慌てた様子で従った。

「ヴィルヘルム」

部屋の奥。長椅子に背筋を伸ばして座る青年が、ヴィルヘルムを呼ぶ。

褐色の肌に豊かな黒髪。黄金の瞳は鋭く、青年は圧倒的な王者の気配を漂わせていた。

この国で王妃を呼び捨てにできる者など、たったひとりしかない。

ハディール王国国王カシャーム・ナジウム・ハディール。大陸中に黒獅子の王として名を轟かせる若き王である。

その王の隣に、ヴィルヘルムは臆することなく腰かける。

「やあ、カシャーム。待たせたかな」

「いいえ。その子は？」

ヴィルヘルムが抱えるミハエルに、カシャームの金色の瞳が向く。ミハエルはきよとした顔でカシャームを見つめ返した。

「ユーリスとギルベルトの子だ。ミハエルという。ユーリスたちにはアデルの結婚式的时候会っただろう？」

「ああ、ローゼンシュタインの。父親によく似ていますね」

ちらり、と投げかけられた視線にユーリスは自然と膝をついていた。

年若いながらも王として、アルファとしての貫禄と威厳を感じる泰然とした態度だった。

ギルベルトら護衛騎士たちも床に膝をついて、シュテルンリヒト式の最敬礼の姿勢を執った。

「お久しぶりでございます、カシャーム国王陛下。シュテルンリヒト王国王妃アデル・ヴァイツェン・シュテルンリヒトにございます。先日は、わたくしどもの結婚式にお越しくださりありがとうございました。このたびも、ハディール魔法大学の開校式にお招きいただき、大変光栄でございます」

立礼のままアデルが口上を述べた。

少々きこちなくはあったが、詰まらずに言い終わり、ユーリスはほっと胸を撫で下ろした。こういう場が慣れないアデルは、失敗しないようにと道中で何度も練習したのだ。その成果が無事に出せて、ユーリスは大いに安堵した。

「こちらこそ、魔法大国シュテルンリヒトでも高名な魔法使いであるアデル妃に、開校式に出席してもらえると望外の喜びである。遠路はるばる、ハディールまでよく来てくれた」

カシャームの言葉を受けて、アデルが深く一礼する。

「シユテルンリヒトの友人たちよ。ささやかではあるが、歓迎の宴を用意した。ハディール自慢の料理と酒を存分に楽しんで、少しでも長旅の疲れを癒してほしい」

カシャームがばんばん、と手を鳴らす。

すると、謁見の間にぞろぞろと使用人たちが入ってくる。

まず絨毯やクッションを持った使用人たちが、部屋中にそれらを敷き詰める。ユーリスたちはアデルを筆頭に、最も王の近くの席に案内された。

次に入ってきたのは、料理の載った大皿を抱えた使用人たちだった。焼いた肉や魚。見たこともない果物。さまざまなハディールの料理は全て贅を凝らしたものであり、とても豪華で美しかった。絨毯の上にあつという間に宴の用意が整っていく。

最後の料理が並べられて、全員に繊細な彫金で飾られた金の杯が配られた。その中に、葡萄酒が注がれていく。

王の持つ金の杯にも葡萄酒が注がれ、それをカシャームは高く掲げ持った。

「今日の良き日に」

乾杯の合図とともに、獣人たちが酒を呷る。

ユーリスはアデルの持つ酒をそつと水に変えて、彼のもとへ料理を取り分けた。

晩餐会の際はひとり一皿ずつ料理が出てくるシユテルンリヒトとは違い、ハディールの宴は大皿から自由に料理を取るらしい。事前にハディールの礼節や作法を勉強したときも驚いたが、実際に

目にするるとさらに驚かされる。

配られた皿や杯にまで飾りが彫られ、貴石が嵌め込まれている。落として傷つけてもしたらと思うと、料理を楽しむどころではない。

おまけに、ユーリスにはもうひとつ大きな懸念があった。

「ミ、ミハエル……」

その心配とは、ずっとヴィルヘルムに抱きかかえられているミハエルのことだ。

今もヴィルヘルムの膝の上で、渡された砂糖菓子を頬張っている。もともと人見知りをしない子ではあったが、構ってくれるヴィルヘルムにすっかり懐いている。

アズラクといいアデルといい、美人が好きなのもかもしれない。

「気に入るなユーリス。いい子だぞ、ミハエルは」

「しかし」

楽しそうに言うヴィルヘルムに甘えていいものか、と躊躇うユーリスを見て、ヴィルヘルムが笑う。余裕たっぷりのヴィルヘルムとは違い、ユーリスとしては彼の高価そうな衣服に汚れでもつけないかと気が気ではなかった。

そうこうしているうちに宴は恙なく進んで、アデルを中心としたシユテルンリヒト一行の周りに、獣人たちが酒を持って集まってきた。

ハディールの宴ではこうやって、席を立てて酌をし合うものなのだ。

宴に招かれているのは、ハディールの六つの部族長と大臣、および將軍たちだという。

頭に大きな角のある穏やかな老人に教えられて、ユーリスはなるほど、と頷いた。大臣たちも各部族から均等に選出されるらしく、それで様々な種族の獣人たちが集まっていたのだ。

老人は青牛族の部族長で、牛の獣人らしい。老齢であるのに見上げるほど背が高く、若い頃はさぞ体格がよかつただろうと思わされた。硬そうなこげ茶色の髪と髭も、優しげな黒い瞳も、言われてみれば牛の特徴だ。

「青牛族は草食獣人の一族でしてな。他に鹿や山羊もおりますよ」

「みなさま角が立派ですね」

宴の席にいる一族の者たちを紹介されて、アデルとふたりで感心する。その全員が大きな体躯と立派な角を持っていたからだ。

部族長や大臣たちのほとんどがアルファだ。獣人のアルファは大型動物であることが多いから、重臣たちを集めるとみな身体が大きいのだ。

「我々、ハディールの獣人はもともと別々の部族として独立して暮らしておりました。ひとつの国としてまとまってもなお、各領地はあまり交流がありませんからね。こうして他国のお客様でもないと集まらないのです」

そう話してくれたのは鋭い目を持つ白鷲族の部族長だった。猛禽の翼と鉤爪を持ち、この宴のために南部にある領地から飛んできたと思う。

「部族長は王都に住む決まりがありますが、我ら鳥の一族は翼がありますからね。みな、領地と

王都を行ったり来たりしていますよ」

有事の際はすぐに集まれるように、ハディールでは部族長は王都に住むことになっているらしい。入れ替わり立ち替わり、各部族長たちがアデルに挨拶をしに来てくれた。

彼らは概ね友好国の王太子妃であるアデルに好意的だった。明るく楽しいに、ハディールの話や獣人の文化について話してくれる。

だが、全ての獣人がそうだとはいえない。

「アデル妃殿下は、それはそれは優秀な魔法使いだと聞いております。我ら獣人は身体能力こそ優れているものの、魔力では人に及びませんから羨ましい限りです」

「それなのに魔法を学ぶ学校を作るなど、何を考えておられるのか」

縞模様のお耳と尾を持つ老翁が、はあ、とため息交じりに言った。隣の同じ獣人らしき壮年の男も呆れたように笑う。その笑顔の中に見える明らかな悪意を、ユーリスは微笑みながらも察してしまっ。

彼らは「人」、ひいてはヴィルヘルムによい感情を持っていない。

老翁の方はムタリム・ナムラ。壮年の男の方はイハク・ナムラと名乗った。

ふたりのうち特にムタリムという老翁の方は、アデルにも彼の魔力や魔法を賞賛しつつも、当てこするような物言いを繰り返していた。

ハディール王国を形作る六つの部族は、聞いていた通り本当にはらばらの種族だ。それこそ、ひとつの国としてまとまっているのが不思議なくらいにそれぞれの部族は違う。

だが、彼らにはひとつにまとまらねば生き抜けなかった歴史があった。初代の黒獅子王によりハディール王国が建国されたのは百年ほど前だ。

それまではこの千里砂漠を中心に、各部族はそれぞれの住処で交流もなくひっそりと暮らしていたという。

静かで穏やかだった暮らしを脅かしたのは、繰り返される人間との争いの日々だった。

人から異形として恐れられ、迫害された獣人たちは、人の圧倒的な数の多さに対抗するために、六つの部族をひとつにまとめることにしたのだ。

そうして建国されたハディールは、しかし、人と積極的な交流をすることで国として栄えてきた。そうやってシュテルンリヒトとも仲を深め、文化を交わらせている。

だが、獣人と人は絶対に相容れないと考える獣人だっているというわけだ。

「みなさんは赤虎族の方々ですか？ 部族長さん？」

「さようでございます。しかし、族長は我らではありません」

アデルの問いに、ムタリムはあちらに、と料理を挟んで正面に座る赤い髪の年若い青年を指した。青年は誰とも会話をせずに、ひとりで黙々と酒を飲んでいる。

「あれが赤虎族の部族長であるマハリブでございます」

ムタリムが手招きをすると青年——マハリブは少し意外そうな顔をして、こちらに向かってきた。アデルの近くに膝をついた彼に老翁が言った。

「これマハリブ、部族長であるのに何をひとりで酒を飲んでいる。アデル妃殿下にご挨拶せんか」

「……赤虎族の部族長を務めております、マハリブ・ナムラと申します」

「アデルです。どうぞよろしくお願いたします」

赤虎族のマハリブは、金色の目をした赤虎の獣人だった。

燃えるような赤い髪には黒い縞模様が入っていて、そこから生える丸い耳も腰のあたりで揺れる

尾も、赤毛に黒縞の毛並みだ。

肉食の大型獣人らしく大柄で、精悍な顔つきをしていた。野生の虎を思わせる切れ長の金の目は

鋭く、探るような視線をこちらに向けている。

おまけに口数が少なく、挨拶をするとすぐに口を閉じてしまう。その代わり、彼を呼びつけたム

タリムがよく喋った。

「赤虎族は北の山間部を領地としておりましてな。代々北方の守り手としてハディール王家に仕え

ております。王都にいる若い衆は皆、軍部に所属しているのですよ。こちらのマハリブも先日陛下

より將軍の位をいただいたばかりで——」

延々と続く赤虎族の老翁の話の間、ユーリスは違和感を覚えていた。

部族長だというわりに、マハリブとムタリムではどう見ても力関係に差があった。もちろん、上

なのはムタリムの方だ。

マハリブを自慢するようではないながらも、彼のこともまた「至らない」だとか「未熟」だとか、謙

遜とは違う批判の言葉を口にしている。

それにどう答えていいかアデルとユーリスが困っていると、そこに「ユーリス」とヴィルヘルム

が声をかけてくれた。彼もまたムタリムの人に対する悪意を知っていて、助け船を出しに来てくれたのだ。

「これはこれはヴィルヘルム妃殿下。ご機嫌麗しく」

「赤虎族のムタリムか。健勝そうで何よりだ」

ヴィルヘルムの登場に、ムタリムが嬉しそうに顔を歪めた。

対して、ヴィルヘルムは冷たい目でムタリムを一瞥する。

「最近魔法大学の開校準備などでお忙しくされていると聞きましたが、お元気そうで何よりでございます」

「私の話など、ムタリムの耳に入れることでもないだろうに。しかし、そうだな。おかげさまで忙しく過ごしている」

「我が国の発展のために尽力してくださるのではありませんが、妃殿下はご自分の役割をお忘れなのではないですか」

「……と、言うこと？」

「お子がおられませんが、たびたび後宮からお出になられるのはいかがなものかと」

「後宮から出る出来ないに、子は関係ないだろう」

「関係ありますとも。歴代の王妃殿下がたは婚姻後、滅多に後宮の外に出られることはありませんでした」

「そのような決まりはないし、カシャームが許しているのだからお前にとやかく言われる筋合いは

ないな」

ふたりの間に吹き荒れる吹雪のような鋭い言葉の応酬に、ユーリスの方が緊張してしまう。

予想通り、ムタリムはヴィルヘルムのことが気に食わないようで、王妃であるヴィルヘルムに大層な物言いをする。だが、赤虎族の部族長よりも力を持つ彼にはそれが許されるのだろう。

ヴィルヘルムは毅然とした態度でムタリムの無礼に応じている。その慣れた様子から、これがいつもの光景なのだ。ユーリスは理解した。友好国出身のオメガの王妃といえど、手放しで全ての獣人に歓迎されたわけではないのだ。

ヴィルヘルムとムタリムが揉めていると気づいたのか、カシャームが席を立ち、こちらにやってくる。

厳しい顔をしたカシャームの姿を見て、ムタリムは大仰な動作で頭を下げた。

「ハデイールの太陽カシャーム国王陛下にご挨拶申し上げます」

「顔を上げよ、ムタリム。我が妃と何を話している？」

「婚姻されて六年になりますゆえ、そろそろお世継ぎをもうけることに専念されては、と申し上げておりました」

カシャームはその言葉を聞いて眉根を寄せた。だが、ムタリムは怯まない。

「カシャーム王も、お世継ぎが未だにひとりもおられないことをどうお考えですか。世継ぎをもうけることは国王としての責務。王妃殿下が産めぬとおっしゃるのであれば、側妃を後宮にお迎えただかねば」

「ムタリム、口が過ぎるぞ」

不快そうに眉をひそめたカシャームに咎められても、ムタリムは平然と国王を見つめ返した。その顔には余裕すら感じられる。

「いいえ、言わせていただきます。ヴィルヘルム妃殿下が政まつりごとに参加されたいのですしたら、ご自身の代わりに子を産む側妃を後宮に入れるべきなのです」

「側妃はいらぬ、妃はヴィルヘルムだけでよい」

「このムタリム、陛下がそうおっしゃるので見守っておりますが、もう我慢の限界でございます」
首を横に振るカシャームにムタリムが食い下がる。おまけに「妃殿下」と矛先を変えてきたのだからたまらない。

「妃殿下。よもや六年も子をなせぬお方が、側妃はいらぬとは申されませんよな」

「好きにするといい。カシャームが許可を出せば、私に反対する権利などありはしない」

「ヴィルヘルム！」

気色ばむカシャームとは対照的に、ヴィルヘルムは冷静だった。

王妃として「王の許可があれば受け入れる」と返した言葉を、カシャームとムタリムはそれぞれのように解釈したのだろうか。

ムタリムはにやりと笑ってヴィルヘルムに頭を下げた。

「さすが妃殿下でございます。聞かれましたか、陛下。妃殿下もこのようにおっしゃっておいでですので、こちらで側妃の候補を選ばせていただきますね」

そう言っ、カシャームの拒絶をこれ以上聞かないように、とさっさと席を立った。

背後に控えていた壮年の男とマハリブも彼の後に続く。

ムタリムが退出してから、ヴィルヘルムがようやくほっと息を吐いた。

「すまないな、ユーリス。見苦しいものを見せた」

「いいえ。あの、よろしいのですか」

おぼえずと訊ねると、ヴィルヘルムは「ああ」と軽く頷いた。

「いいんだ。ムタリムが『側妃を』と言い出すのは今に始まったことではない。カシャームが内々に処理するだろう、な？」

ヴィルヘルムが首を傾げると、耳飾りがしゃらりと揺れた。

カシャームが「もちろんです」と渋い顔をする。泰然とした国王としての顔とは少し違う素直な表情に、ユーリスは彼がまだ十九歳の若者であることを思い出した。

「ムタリム様は人がお嫌いなのですな」

「そうだな。赤虎族はハディールでも黒獅子族に匹敵する力を持つ部族なんだが、あのムタリムは特に人嫌いなんだ」

「ムタリム様は国内でも有数の保守派でございます。オメガの妃は後宮から出るべきではないとお考えなのです」

ヴィルヘルムの説明をアズラクが補足する。

その内容に、ユーリスはなるほど、と頷いた。